

大東亜会議・大東亜共同宣言と文学（者）

松本和也

I

これまでの文学（史）研究において、昭和一八年の大東亜会議や大東亜共同宣言が話題とされるのは、森本薫「女の一生」と太宰治「惜別」に関わる場合に、ほぼ限られてきた。たとえば、《森本薫の五幕の戯曲「女の一生」と、太宰治の青年時代の魯迅を主人公にした小説「惜別」は、いずれも大東亜共同宣言の文学作品化の要請に答える実作として企図された¹⁾》といった具合である。しかも、その多くは右の二作品解釈に際して、執筆背景の「コマ」として、大東亜共同宣言に論及する程度にとどまるものである²⁾。

しかし、同時代の文学者たちは、日本文学報国会を介して大東亜会議・大東亜共同宣言に関わっていた、少なくともある程度以上には意識していたと考えた方が、当時の実情に近いように思われる。まずは、近年の辞典記述から、大東亜会議の概要を確認しておく。

英米の本格的反攻に備えてアジア諸民族の戦争協力を確保することを目的に、一九四三年十一月五日から六日かけて東京の帝国議会議事堂で行われたアジア諸国の代表による会議。日本から東条英機首相、中華民国から汪兆銘行政院長、満洲国から張景惠國務総理、タイ国からワンワイターコン殿下、フィリピン共和国からラウレル大統領、ビルマ国からバモオ首相が出席し、自由インド仮政府首

班スバスRチャンドラRボースがオブザーバーとして陪席した。会議では、「大東亜共同宣言」が採択された。宣言には、戦争完遂をうたった前文に、道義にもとづく共存共栄などの大東亜建設に関する本文が列記された。宣言の文言作成の背後には、戦争遂行上の要求や日本の指導権を盛り込もうとする大東亜省・陸軍と、圈内諸国の独立尊重と平等互恵を掲げ、戦争目的を連合国の目的と相対させて、国際秩序建設の主導権を確保しようとする重光葵外相との間で攻防と妥協があった。このため宣言は、諸民族の戦争協力にも、連合国への外交攻勢にも効果を挙げるものとはならなかった。また本文に示された内容は、各地の実情とかけ離れたものであった³⁾。

その歴史的な評価については、引用末尾の二文が端的に示している。今日からみれば滑稽にすら映じるとしても、同時代において大東亜会議は大東亜戦争遂行のための加速装置として、現実世界／言説双方において、大きな存在感・影響力をもつものだったのだ。

ここで大東亜会議に関する先行研究を参照してみれば、《大東亜共栄圏イデオロギーの中のアジア主義の側面が国策としてピークをなすのが、昭和十八年の大東亜政略》だと指摘する政治学者の安田利枝は、前後の状況を次のように整理している。

この年日本は、汪兆銘の南京国民政府に租界を返還し、治外法権を撤廃して不平等条約を改訂し、またビルマ、フィリピンに相次いで

独立を与えた。そして、これら大東亜政略の総仕上げとして、十一月、東京に大東亜共栄圏内独立国の指導者を集めて大東亜会議を開催し、大東亜共同宣言を发出了⁴⁾。

さらに安田は、《大東亜会議開催と大東亜共同宣言とは、重光外相の戦後に日本が生き残り発展する基礎工事としての大東亜同盟構想と、東条首相の大東亜戦争完遂のための大東亜政略とがからみあつて日程にのぼつてきたもの⁵⁾》だと位置づけている。

また、国際政治学者の波多野澄雄は、《大東亜宣言は少なくとも三つの要求を満たす必要があつた》として、《当面の戦争遂行に資するという要求》、《アジア諸国家の結束を促すための共同綱領としての要求》、《「外交攻勢」として国際秩序に関する普遍的理念を盛り込むという要求》をあげ、《最終的な宣言は、三つの要求を辛うじて満たし、前文を含めた全体として、三つのいずれの立場からも説明可能なもの》、《つまり、玉虫色のものとなつた》⁶⁾と整理している。これらの指摘だけでも、大東亜会議・大東亜共同宣言双方とも、遂行中の大東亜戦争下において、国内外の政治・外交上の多様な思惑が入り組んだもので、それゆえに、(多様な立場にとつて)当初企図された性格や効果へと結実し得なかつたといえよう。にもかかわらず／それゆえ、大東亜会議も大東亜共同宣言も現実化され、現実世界／言説双方において、大きな存在感・影響力をもつことになつた。というのも、大東亜会議・大東亜共同宣言は《玉虫色》の性格を帯びていたがゆえに、事後的に周囲から言表行為を通じて意味づけ、領有していくことが可能な対象となつたのだから。

いずれにしても、大東亜会議・大東亜共同宣言は、当時も今も、政治・外交上の論題として議論されてきたことは確かである。また、会議の企画や参加者を考えても、大東亜共同宣言の成立過程を考えても、そこに直接的に文学者が関わっていたわけではない。それでもなお、文学(者)

が大東亜会議・大東亜共同宣言に無縁だつたとは、およそいえない。というのも、大東亜戦争下において文学者は、その社会的存在意義を問われる状況がつづいており、そうした中、大東亜会議や大東亜共同宣言に関わることは、文学者にとつて、大東亜戦争への貢献をひろく社会にアピールする格好の機会でもあつたのだから。

そこで本稿では、大東亜会議・大東亜共同宣言をめぐる言説の調査・分析を通じて、それらと文学(者)との切り結びを、同時代の文学(者)の立場から考察していきたい。

II

本節では、大東亜会議をめぐる新聞報道を検討対象として、個々の言表において用いられた修辞や、それらに対する文学(者)の関わり方を検証していきたい。

まずは、大東亜会議開催前の記事として、無署名「社説 大東亜会議に寄す」(『朝日新聞』昭18・11・5)を、次に引く。

大東亜戦争二周年を近く迎へるに当り、戦局ますます苛烈なりと雖も、大戦のさなかに米英の桎梏を排して起つた東亜の新生五独立国代表が帝国代表と一堂に相会して、大東亜会議を開催するに至りたる事實は、大東亜諸民族解放戦の凱歌既に揚りたるの感があり、吾人の慶祝措かざるところである。

ここでは、大東亜会議の開催時期が、大東亜戦争開戦から二周年に重なることが指摘され、それに伴い、米英に対抗して《東亜の新生五独立国代表》と《帝国代表》が集うという、大東亜戦争と同様の図式が明示される。こうした一節にすら、各国間の序列関係は刻まれているが、それゆえに、帝国日本は次のような《使命》を担うことにもなる。

大東亜政治組織が既に準備された今日、この大東亜諸国家、諸民

族の全力量を結集することに今次会議の使命があると考へられるのであるが、更にアジア民族の政治的、経済的並に精神的大同団結が敵米英の戦争目的をして完全に大義名分を失はしめつゝ、ある事実を銘記し、今次会議をもつて対米英戦遂行途上における一大里標たらしめんことを、ここに吾人は深く期待するものである。(2面)

右の引用に即すならば、大東亜会議はその内実よりも、開催自体が《一大里標》となり得るイベントであり、《東亜の新生五独立国代表》を招き、さらにボース(印度)の参加が決定した時点で、《大東亜諸民族解放戦の凱歌既に揚りたる》ということにもなる。

そうした使命を担う帝国日本の来歴・位置は、次に引く無署名「社説大東亜会議の開催」(『読売報知』昭18・11・5)によく示されている。

大東亜戦争は、すなはちわが八紘為宇の精神と明治維新の大業完成のために、悪鬼米英勢力を覆滅すべく敢然鏖をとつて蹶起したのである。「略」かくて一世紀東亜を蔽うた妖雲は一掃され、われらの郷土の肅正は成つた。この淨域アジアを恒久ならしむべきもの、たゞ一つ十億民衆鉄の団結であり、自発的協力をもつてする聖戦完遂であり、道義共栄圏の建設である。いまやこれ等の諸項を事実の上に顕揚すべき大東亜会議は開かれる。(2面)

ここでは、帝国日本の立場から、大東亜戦争開戦に至つた理由、《悪鬼》たる米英から勝ちとつた戦果、アジア諸国の独立(『アジア建業』、それらを総合しての《道義共栄圏の建設》が謳われ、それらを《顕揚》(承認するためのイベントとして大東亜会議が位置づけられている。修辭としては、米英を《敵》として対置し、《東亜》の《正義》が掲げられ、《十億民衆鉄の団結》が、しかも《自発的協力》として成し遂げられつつあり、かつ、その盟主は《皇軍》を擁する帝国日本だとする、支配的な言説が反復されていく。

この《団結》の親密性を強調すれば、無署名「社説 東亜の家族会議」(『毎日新聞』昭18・11・5)において《われ等は東亜の家族会議の前途を祝福すると共に、その第一次会議が十分の成績を挙げんことを切望す》(1面)と言表されたように、大東亜会議に参加する諸国・諸民族、アジア一〇億の共同体を《家族》に喩える修辭が用いられていく。

大東亜会議が一月五日に開幕すると、すぐさまそのことが報じられていく。⁸⁾次に引く「大東亜会議赫々の成果 世界史に比類なし」(『朝日新聞』昭18・11・6)では、大東亜会議を世界史的イベントとして意味づけていく修辭が、意図的に用いられていく。

五日の大東亜会議は大東亜戦争が凄愴なる攻防決戦を海に陸に空に展開しつゝあるさなかに東亜六ヶ国の代表者が一堂に会して東亜建設、戦争完遂の方略に関し心底より所信を吐露し十億結集の決意を新にした点において世界史を繙くもその前例はなく、文字通り歴史的な政治会同であるが、東亜の興亡を担つて起つた各国代表の所見が期せずしてその格調高き世界観、政治倫理観に基き幾多の共通点を有してゐることは注目すべきである

しかも、同記事では《十億結集》の内実として、《各国代表の所見》に《幾多の共通点》が見出され、それが次のように整理されて報じられていく。

一、各国代表が一堂に会してこの有意義なる会議を開催することとなつたのは真に喜ばしい、この機会に日本の戦争遂行、共栄圏建設の努力に感謝の意を表すると共に同じく爾余の東亜各国の誠意あふるる努力を讃へ

一、米英のアジア侵略の野望を打破し得てはじめて東亜は本然の姿に還るのであつて東亜の保衛を断固確保しなければならぬ

一、戦争完遂の決意を新にし、共同戦争の先登に立つ日本に対しあらゆる点から積極的寄与をなす

一、各国家は鋭意産業、経済の進展につとめその前途は洋々たるものがある

一、東洋精神の神髓を發揮して米英に毒せられざるアジア特有の文化の發揚を図る（2面）

こうして、『日本／東亜各国』という分節を挟みつつも、参加各国は理念と利害を共有する共同体として、『東亜』を『本然の姿』に還すべく、『努力』することが確認される。

この時、帝国日本の立場は、『いま一堂に会せるアジアの指導者等と其の背後の国民達は、悉く日本及び日本国民を信頼し、其の力によつて、アジア解放の理想を達成せんとしてゐる』（津久井龍雄「アジア救興 大東亜會議の意義」、『読売報知』昭18・11・6、4面）ものとして、東洋の諸国（民）からも『信頼』され、その期待が言表されていく。

その後も、大東亜會議関連記事は紙面を賑わしていく。その大半は、反復を通じて定型と化していく、大東亜戦争を肯定する際と同様の論理・修辭による言説である。野村重臣「大理想の確立へ 雄渾なる曠古の大宣言」（『朝日新聞』昭18・11・7）を、次に引く。

顧るに東亜の諸民族は過去百有余年の間アングロサクソンの侵略と搾取に呻吟し、アングロサクソン国米、英の帝國主義支配に屈従し來つた。然るに今やアジアは大東亜戦争を契機として、敵米、英を撃滅し、自己を解放すべき絶好の機会に際した。

ここにいう『自己を解放』とは、既出の『本然の姿』に還る、ということと同義だろう。さらに野村は、『東亜の諸民族は「一つ」に結束してアングロサクソンの侵略と搾取、米、英の帝國主義支配を撃滅すると同時に、共存共栄の新秩序を建設すべき』（4面）だとして、大東亜會議・大東亜共同宣言による、『東亜諸民族』の『結束』を促していく。

つまり、大東亜戦争とは短期的かつ限られた国家間の対立ではなく、

東洋（大東亜）にとつては、長期的視座、つまりは歴史のスケールから捉えるべき世界史的聖戦であり、長きにわたる米英によるアジア支配の歴史を転換させる記念碑的な営為なのだ。そして、大東亜會議・大東亜共同宣言とは、その意義を確認、拡声するイベント／言説なのだ。

III

朝日新聞主筆の緒方竹虎は「世界史に新時代 大東亜會議の感激」（『朝日新聞』昭18・11・7）と題した一文において、『大東亜六国の代表が一堂に会することすら既に画期的であるが、あの嚴肅なる空気のなかに、今後幾百年かに亘る大東亜建設の礎石ともいふべき大憲章が、茲に嚴かに議決された』と、世界史的な大東亜會議から生みだされた大東亜共同宣言を特筆して、次のように意味づけている。

大東亜共同宣言を貫く大精神は万邦をして各々その所を得しめ、兆民をして悉くその堵に安んぜしむる肇国の理想で、六国の代表が一堂に会して腹心を布き、推敲を重ねて宣言案を完成したところに、この大憲章の歴史を曠うする光輝がある。（1面）

ここで、大東亜共同宣言を新聞掲載版（『読売報知』昭18・11・6夕）から引いておく。

大東亜共同宣言

抑々世界各国が各其の所を得相倚り相扶けて万邦共栄の榮を偕にするは世界平和確立の根本要義なり／然るに米英は自國の繁榮の爲には他国家他民族を抑圧し特に大東亜に対しては飽くなき侵略搾取を行ひ大東亜隷屬化の野望を逞うし遂には大東亜の安定を根柢より覆さんとせり大東亜戦争の原因茲に存す／大東亜各国は相提携して大東亜戦争を完遂し大東亜を米英の桎梏より解放してその自存自衛を全うし左の要綱に基き大東亜を建設し以て世界平和の確立に寄与せ

んことを期す

一、大東亜各国は協同して大東亜の安定を確保し道義に基く共存共栄の秩序を建設す

一、大東亜各国は相互に自主独立を尊重し互助敦睦の実を挙げ大東亜の親和を確立す

一、大東亜各国は相互に其の伝統を尊重し各民族の創造性を伸暢し大東亜の文化を昂揚す

一、大東亜各国は互恵の下緊密に提携し其の経済発展を図り大東亜の繁栄を増進す

一、大東亜各国は万邦との交誼を篤うし人種的差別を撤廃し普く文化を交流し進んで資源を開放し以て世界の進運に貢献す（一面）

こうした大東亜共同宣言をうけて、「社説 大東亜建設の性格」（『読売報知』昭18・11・8）においては、次のような解釈が示された。

この宣言に示された大東亜は、東亜各国の確立された独立性と、全世界との媒介体として、世界の平和建設のために無碍の融通性と弾力性とを有し、個と全とを結ぶ大きな役割を負責してゐる。支那事変以来の東亜各国の尊い経験は東亜建設の理念を漸次高度化しつつ遂に大東亜宣言に到達したのである。しかしこの高き理念を厳然たる現実に移すためには、前途なほいくたの努力を必要とすること勿論である。盟邦の覚悟と発奮とをこゝに改めて要請したい。（2面）

ここで、見せ消ちのように帝国日本が主語とされているのは確かだが、各国の《独立性》に配慮した修辭であることも間違いない。しかも、無署名「時事解説 大東亜会議の意義」（『世界と我等』昭18・12）で大東亜宣言は、《実に世界新秩序に対する高遠な理想と目標を明確に表はしたもので、まさに、世界歴史に特筆さるべき重大なる意義を有するもの》、《吾々が世界に誇り得る人類正義の宣言》（13頁）だと意味づけられたよ

うに、大東亜会議には《人類正義》までもが担保されていく。また、幣

原坦「十億の総意結成——大東亜と鍊成について——」（『朝日新聞』昭18・11・16）では、大東亜共同宣言の読後感を《日出づる東亜の清爽な朝ごちに喩へ》た上で、大西洋憲章を《日沈む西土の混雑せる夕まぐれ》と否定的に對置しながら、《共同宣言が闡明した大東亜建設の綱領》

については、《十億民族の総意結成であるのみならず、天の下を家とする、私心なき東亜道義を、世界各国に偏照せしめる陽光》（4面）だと、

やはり比喩を用いて顕揚していく。同論後半の論旨については、今泉孝太郎も「第一線 五原則を貫くもの」（『読売報知』昭18・11・16夕）で、

《今次の大東亜会議の五原則を貫くものは大日本帝国の道義性》（1面）だと強調していく。こうした、《五大原則の一々の趣旨は、米英の考ふる

世界秩序の正反対を考ふるれば、最も明瞭に理解せられる》（北主幹「大東亜共同宣言の意義」、「祖国」昭18・12、6頁）といわれるような、敵

米英に大東亜の道義性（正義）を對置する言表構造は、《五原則は通じて大東亜共栄圏の新秩序を確立し、各々その所を得つ、繁栄を保ち、依

つて世界の平和と進運に貢献せんとするものであつて、先づその障害となる所の米英をして悪虐なる過誤の生活より解脱せしめんとする一体的

結束を固むるにある》（10頁）と言表する佐々井信太郎「大東亜共同宣言五原則の実践に就て」（『大日本報徳』昭19・1）にもみとれる。ある

いは、《わが大東亜共同宣言は心の底からして、領土秩序の社会化即倫理化即道義化を、日本及び全世界の、勿論大東亜の、歴史及び現実に対す

る正しき理解を条件として、最善の将来のために責任を具備して理想するもの》だと領土を問題化する「大東亜共同宣言と時運——領土秩序社

会化の必然とその支配——」（『財政』昭19・4）の杉森孝次郎にしても、

米英の《本質的時代錯誤及び反動性、そして反正義性》（6頁）を對置し

ている。一連の言表を総合したとも目されるのが、次に引く、鹿子木貞

信「第一線 大東亜宣言とカイロ会談」(『読売報知』昭18・12・9夕)である。

一百年前の往時を夢想回顧、低徊去るに忍びざるのおもむきあるこのカイロ会談に対し、わが大東亜共同宣言は、まさに来らんとする一百年の東亜をゆびさし、日の本を中心とする満、支、泰、比、緬、印諸国の綺羅星のごとき光輝ある秩序を約束するもの、その気宇の大、その構想の雄、まことに天馬空を征くの概あるもの。(1面)

もとより、右の言表にも示されたように、大東亜独立各国の連携を謳いつつも、その《中心》に帝國日本が自明の前提として設定されるという二重基準は、ここにも明らかである。

ならば、当の大東亜各国に大東亜共同宣言はどのように受けとめられたのか、その一端を特集記事「大東亜宣言に込めて」(『朝日新聞』昭18・12・8)に即して確認していきたい。同記事のリード文には、《各国思想戦の第一人者は「大東亜宣言に込める」熾烈なる気魄を吐露した熱血の文字を本紙に寄せ、今日の感銘を披瀝した》(4面)とある。

つづいて、《感激の日に寄せる共栄圏の思想人》として、四名のコメントが集められている。泰西・ピヤ・パホン大將は「友愛精神の示現 一翼を担ふわれらの誇り」で、《東亜はもはや地理的名称ではなくなり共栄圏としての性格を付与された》とした上で、大東亜共同宣言については《アジア諸民族を共通の利害で結合せしめる友愛精神を示現したもの》と好意的に捉えている。比島・カミロ・オシアスは「相互扶助の大理想」で、《大東亜の自由を獲得した国々の代表が満場一致採択した五原則は基本的なもので、その影響の及ぼすところ極めて大》だと、参加国の独立(自由)を言祝ぎながら、大東亜共同宣言にみられる《美しい希望と崇高な抱負とは平和と自由と道義に基く新秩序の創造に寄与すべき新政府フィリピン共和国の憲法の根本観念と全く一致するもの》だと捉えて、足並

みを揃えてみせた。同様に、ビルマ・ド・ティン・ヂーは「われらの宿望成る」において、《この宣言が常に大東亜の政治家はじめ、祖国の解放と世界の平和を目指して日夜つとめつつある諸国民の精神を表現したにと、まらず一年有余の以前わが青年連盟が結成されて以来我々ビルマの若人の魂の中に生々といぶきつ、ある精神と理想をも、ここに最も明確に表現したものであることを知る》という修辭によって、やはり共振を言明していく。同様の声は、《皇道の精神》と《孝道の精神》との共振を言表する、次の中華・黄善生「天道」の回復へ——大東亜宣言に込め——(『朝日新聞』昭18・12・11)にもみられる。

東亜精神の核心はすなはち東亜民族の核心に基いて表現される。日本においては民族精神の核心は皇道思想にある。日本民族はこの崇高な理想に基いて幾千年来民族の生命力を發揚し、民族の道義精神を發揚して来た。わが国における民族精神の核心は中国幾千年来の孝道の精神にあり、これを推しすすめれば皇道の精神とが合致する。(4面)

こうして、大東亜共栄圏を構成する独立各国が、文字通り独立国として平等な立場から大東亜共同宣言との重なりを言明していく。同様の事態は、日本でも進んでいく。増谷達之輔は「大東亜会議に寄す」(『短歌研究』昭18・12)で、《大東亜共同宣言の内容たる大東亜建設上の五大原則が、常に帝國が中外に宣明せる大東亜戦争完遂、大東亜共栄圏建設の方針に悉く一致せる事実》を再確認した上で、《帝國の真意が大東亜十億の民族の心からなる理解にまで透達し、大東亜諸国家民族が、真に同志の一体感を以て大東亜戦争の完遂、大東亜共栄圏の建設に挺身すること厳肅に表明したるものとして吾等の慶祝措かざるもの》(4頁)だといふ。また、《全く大東亜戦争は世界戦史上かつてなき深遠な世界的意義を有する大戦であり、今まさに世界史に新たな時代を画しつ、ある》(9

頁)という現状認識を示す「大東亜共同宣言と日華関係」(『揚子江』昭19・3)の秀島達雄は、『日本と中華民国はアジアの中核であつて、古代文化を有し、その共通するところ又極めて多い』、『古くより文化の交流を以て両国間は極めて密にしてその互助精神は今日の比ではなく、愈々以て将来に思ひを致すとき、両国は政治に経済に文化に凡ゆる点に於て密接不離の關係を保ち永遠の國家發展のために、相互間に徳信の義を以て相接し相計らねばならない』(12頁)と、相互理解の重要性を謳っている。もちろん、日本には相互理解では困るといふ立場もある。つまり、いくら独立国が集おうが、大東亜共栄圏の盟主は日本の他ではないといふ二重基準を體現した言表である。そうした発想を端的に示した、無署名「主張 大東亜共同宣言の精神」(『言論報国』昭19・1)を次に引いてみよう。

神皇の大道を離れて大東亜の精神はなく、大東亜の精神を離れて大東亜共同宣言は存在し得ぬ。一言にしていふならば、皇国の大道こそ、大東亜宣言の基底、大東亜秩序の精神。われらは深くこの真実を認識し、この重大なる責任を覚悟しなければならぬ。(6頁)

こうして同時代の言説上において大東亜共同宣言は、大東亜戦争・大東亜共栄圏を肯定し、正当化し、論理的に根拠づけていく原動力になった。そのことと連動して、米英に東洋を対置する修辞も多用され、大東亜共栄圏という地域の外延が遂行的に改めて意識、言表されていく。そのうち、大東亜共栄圏を担う独立各国も、大東亜共同宣言の方針が自らの理念と等しいものであることを言明していった。他方、帝国日本は、大東亜各国の連携を謳いつつも、その主導権は日本にあるといふ二重基準を陰に陽に保持していった。

IV

本節では、大東亜会議・大東亜共同宣言をめぐる言説に、文学(者)がどのように関わつていくのか、その切り結び方に注目しつつ、文化を主題とした言説を検討していきたい。

たとえば、次に引く板澤武雄「叡智と科学と信愛 大東亜文化の昂揚」(『毎日新聞』昭18・11・7)は、大東亜共同宣言に文化・文化人を関わらせていく言表だといえる。

思ふに大東亜戦争程の正大な理想を掲げた聖戦が曾てあつたであらうか、断じてないのである。聖戦のために一切をあげて戦ふ、これ以上の全人格的活動がありうるだらうか、断じてないのである。戦争即建設のこの大東亜戦争こそが一大文化運動であることは贅言を要せずして明かなことである。

さらに板澤は、大東亜共同宣言に関わらせつつ日本人の役割・自覚について、『日本人が大東亜新秩序の指導者となるためには大東亜文化の昂揚についても吾々日本人の責任が重大であることを痛感せざるを得ない』(4面)と言表して、積極的な関与を促していく。

このように、文学者を含む文化人が、大東亜会議・大東亜共同宣言に関わつて貢献すべき領域が、言説上に創出される。もとより、特定の文化人に対して具体的な依頼や要請があつたわけではない。そうではなく、日本国民として、國家が世界的戦争を遂行していく際、自発的になすべき、文化人の使命感からの貢献・実践が求められていくのだ。

はやくは、中島健蔵に「大東亜文化の道」(『毎日新聞』昭18・11・6)という一文があり、『大東亜の文化といふ言葉は、現代史における極めて明かな現実に立脚し、その重大な意味の新しい發生を歴々と指し得ると同時に日一日と成就されつゝ、ある大構想を含んでゐる』という現在進

行形の世界史に関連づけた理解に即して、次のようにつづく。

現在の戦争は、単純簡明な目的によつて統一された、複雑極まる総力の組織的結集を要求する。一切をその目的に集中し、一切を戦勝に向つて有効に組織して行くこと。これが総てである。大東亜文化の昂揚は、その経過のうちに確実に成就される。そしてそのほかには、全く道がないのである。(4面)

大東亜共同宣言において掲げられた《文化の昂揚》に関わらせつつ、それを《戦勝に向つて有効に組織して行くこと》だけが、《大東亜文化の昂揚》のため《道》だと中島はいう。そこには、次に引く高嶋米峰「論説 カント今在らば」(『文学報国』昭18・11・10)において示された、文化(人)の遅れといった認識も関わっていたのかもしれない。

惟ふに、新秩序の建設とか、新文化の創造とかいふ言葉は、支那事変勃発以来、盛んに用ゐられたところであるが、実は爾来今日に至るまで、はかばかしい成果を示してゐないのであつて、それは、吾々文化人の責任も、反省しなければならぬものもあるが、曩に開催せられたる大東亜文学者大会は、若干これに貢献するところあるべきを、期待してよいと思ふし、又、今この大東亜会議の結果は更により大なる寄与あるべきを信じて疑はない。(1面)

ここで高嶋は、文化人が国策に積極的に《貢献・寄与》していくためのイベントとして、第二回大東亜文学者大会や大東亜会議を位置づけている。別の角度からは、井澤實が「大東亜共同宣言と文学者」(『文学報国』昭18・11・10)で、次のように大東亜戦争開戦後における文学者の環境の変化を、積極的に捉えてもいた。

大東亜戦争勃発以来文壇の大部分は軍隊と共に海を渡つて遠く南方諸地域の実戦に参加して新しい風物に接し又遠い昔よりお互に親しかるべくして、しかも種々の国際的の障壁に阻まれて親しく

なり得なかつた大東亜の諸民族と手を握るの機会を得たのである。自然主義文学輸入以来日本の文壇に氾濫した所謂『私小説』の題材の貧困を啣つた時代のことを考へると、まるで夢のやうで舞台の広汎、構想の雄大なこと日本にとつて蓋し有史以来のことである。さらに井澤は、大東亜共同宣言と文学者とを、次のように結びつけていく。

此世界史的大変革の秋に当り、文壇の諸士も亦時代の潮流に無関心たることは絶対に許されないのであつて、殊に右五大原則の一として文化の昂揚が挙げられてゐることに顧みれば、愈々其責任の重大なることを自覚しなければならぬのである。(略)文学者たる者須く世界の動きに触れて、大東亜の理想実現の爲め努力して、世界的角度より見て特に優れた大文学を生み出す必要があると思ふ。(1面)

ここで明示されたように、さしあたつては、大東亜共同宣言のうち《文化の昂揚》に関わつて文学者の《責任》が具体的に示されていく。それが、「大東亜共同宣言に基づく大東亜建設要綱実現に対する文化的協力案」(『文学報国』昭18・11・10)に至ると、日本文学報国会・文学者は、より積極的に大東亜共同宣言に関わつていこうとしていく。

『大東亜のための大東亜』をもたらしべき大東亜共同宣言の正大なる精神を内外の国民一般に宣布するため、本会ではその有する文化的技能と国民的至誠を挙げて、右宣言に盛られたる大東亜建設要綱の実現を期し、小説、詩、短歌俳句、劇文、評論隨筆、漢詩漢文の各部会幹事会では慎重な討議を重ね、各部会実施要項を左の如く内定、雄渾絢爛たる大文学活動の壮挙に着手すること、なつた(1面)

引用につづいては、小説部会、劇文学部会、評論隨筆部会、詩部会、短歌部会、俳句部会と、部会ごとに具体的な方針と、執筆候補者名が掲げられている。

もちろん、こうした具体的な議論を覆うようにして、東西（比較）文化論という視座から日本の近況を位置づける言表もあった。長谷川如是閑は「総合による創建」上「大東亜文化の昂揚」（『毎日新聞』昭18・11・12）において、まず《多くの東方民族が、各自の偉大な文明を歴史的過去に葬り去つて、しかも、近代西洋文明に拮抗するほどの総合文明をもつに至らなかつた限り、それらの東方民族が、心的にも、物的にも西洋文明の制圧を蒙つたのは已むを得ない次第であつた》と東洋の来歴を語つた上で、《しかし、いつまでもさうした運命にある東方民族ではない》、《大東亜戦争こそは、さうした過去の歴史過程を一挙にして中断せしめんとするものでなく何であらう》と、この戦争の位置づけまでを提示しながら、《今次の大東亜会議とその共同宣言とにおいて、大東亜民族は、わが日本を向導者として、東方文明を中心とする世界文明創建への第一歩を現実に踏み出した》（4面）のだと、大東亜会議と大東亜共同宣言の意義を、改めて説いていく。つづく「総合による創建」下「大東亜文化の昂揚」（『毎日新聞』昭18・11・13）において長谷川は、《日本民族ほど、東方文明を、その純粹性において發展的に総合せしめ得たものはない》としながらも、それが《西洋文明》とは異なる点を強調しては、《大東亜民族のすべてが、日本と協力してその戦争に参加したこと自体が、共同宣言の冀求する通り、大東亜文化の性格を中軸とする、さうして各民族の創造性に依存する世界文明創建の運命と機会との到来を語るもの》（4面）なのだ、と、大東亜文化の性格を言表してもいた。

こうして、大東亜共同宣言が指し示す《大東亜文化》の担い手として、文学者・日本文学報国会が、自動的に浮上してくるような状況が形成されてた。その時、文学者に担い得る具体的な役割は、大東亜共同宣言を国民に滲透させていくことである。無署名「大東亜宣言滲透へ」思想、言論、文学界蹶起す（『毎日新聞』昭18・11・14）では、《文学報国会で

も五大原則を中心主題とした東亜建設の黎明を雄渾壮大なる小説、戯曲、映画、脚本、詩、短歌、俳句に製作、大東亜各国語に翻訳し以て画期的な総合文学運動の展開を期し具体案を研究中である》（2面）と報じられ、次に引く無署名「五大宣言の小説化 新企画の小説部会幹事会」（『文学報国』昭18・11・20）では、その後の進行状況が示される。

大東亜会議に於ける五大宣言は全東亜の総力を結集正義に溢る大宣言として堂々全世界に宣布され此れが滲透普及に注目の集注される時本紙ではいち早く大会特集を発行斯界に範を垂れたが本会に於ては各部署独自の立場より叡智を傾け具体的協力策を練り実行に移すべく各々幹事会等を開催する処あつたが小説部会では五大宣言の一大小説化を企画、悠久の歴史に生きる民族の血脈に滾々と流る倫理性と全東亜団結の姿を米英撃滅の陣頭に登場する日を待望せしめる（1面）

こうして、大東亜共同宣言のイデオロギーを組みこみ、その《滲透普及》に寄与しようとする企画は、翌年、次に引く無署名「絢爛たる才智を集めて大東亜宣言の小説化 正大な文学精神の滲透」（『文学報国』昭19・1・20）をみると、具体化したことがわかる。

この秋既に打てば響くの俊敏と高邁不拔の叡智を^{（文学）}澄して起つた本会四千の会員は各部会それぞれ、最適の筆者を送つてあまねく内外に此の正大無比の眞精神を滲透せしむべく具体策を樹立し、本紙第九号特輯に於て報道せし如く休止する一刻もなく前進してゐるが、小説部会に於いては次の如く五大宣言の小説化を図り鋭意実践に移されることになつた（1面）

こうして文学者は、大東亜共同宣言に謳われ、その担い手として期待された「文化高揚」ばかりでなく、大東亜共同宣言すべてに対して、日本文学報国会各支部による、作品化（の計画・姿勢）を通じて、自主的

かつ積極的に関わっていかうとしたのである。この大東亜共同宣言の作品化が、どのような意味を担う(べき)ものであったかについては、次に引く、福田清人「日本文学の新動向」(『新潮』昭19・1)が端的に示しているだろう。

私は、一発必中の魚雷を抱いて挺身する南海の航機の姿を思ふのである。私たちはもつと一作に対して思ひをひそめねばならない。／それは、今後文学の一動向を示して行くであらう。文報で企画されてゐる勤労青少年向けの叢書や、大東亜宣言の作品化の如き総合企画的な発表様式についても同様である。(9頁)

その後の企画の進行については、先行研究に詳しいので譲るが、結果的には森本薫「女の一生」と太宰治「惜別」の二作品だけが完成をみた。「女の一生」は、昭和二〇年四月、文学座によって渋谷の東横映画劇場で初演、演出は久保田万太郎であった。もう一作の太宰治「惜別」医学徒の頃の魯迅(朝日新聞社、昭20)は、刊行が戦後にずれこんだ。

注

- (1) 尾崎秀樹「大東亜共同宣言と二つの作品——「女の一生」と「惜別」——」(『旧植民地文学の研究』勁草書房、昭46)、59頁。
- (2) 積極的に大東亜会議を組みこんだ一例として、川村湊「「惜別」論——「大東亜の親和」の幻」(『国文学』平3・4)。
- (3) 安達宏昭「だいたいとかいぎ 大東亜会議」(吉田裕・森武磨・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、平27)、370頁。なお、深田祐介『大東亜会議の真実 亜細亜の解放と独立を目指して』(PHP新書、平23)には、『私の少年時代にとつても、昭和十八年の大東亜会議というのは、異様に華やかで、誇らしげな思い出である』(12頁)という一節が読まれる。

(4) 安田利枝「大東亜会議と大東亜共同宣言をめぐる」(『法学研究』平2・2)、370頁。

(5) 注(4)に同じ、382頁。

(6) 波多野澄雄『太平洋戦争とアジア外交』(東京大学出版会、平8)、185頁。

(7) 拙論「太平洋戦争開戦後における文学(者)の使命」(『文教大学国際学部紀要』平31・7)参照。

(8) 各国代表の発言全文は、『大東亜会議演説集』(大東亜省、昭18)参照。

(9) 拙論「第二回大東亜文学者大会・決戦会議——太平洋戦争末期の文学者」(『神奈川大学アジア・レビュー』平31・3)参照。

(10) 注(1)に同じ、65〜71頁。
(まつもとかつや 神奈川大学教授、日本学研究所特任研究員)